

川崎病ガンマグロブリン療法に関する研究
(分担研究：川崎病のサーベイランスとその解析に関する研究)

尾内善四郎、古庄巻史、加藤裕久

〔要約〕 現在、川崎病の治療法として、ガンマグロブリン療法が最も優れたものとされているが、ガンマグロブリンの投与方法、投与量が正確には確立されていない。その点の研究を行う。

〔見出し語〕 川崎病治療
ガンマグロブリン
ステロイドホルモン

〔研究方法〕 ①班員の施設を中心に調査を行う。②施設への郵送調査は、第12回と13回の全国調査のマスターファイルを基に、追加調査事項に関し、情報を入手する。③調査表には原田のスコア、ガンマグロブリン投与後の主要症状の持続、追加療法時の検査値の項目、急性期の心合併症を設定する。④各施設の用量・用法選択法に基づいて解析する。

〔考察〕 古庄の報告に始まったガンマグロブリン療法は、日本、米国でそれぞれ400mg/kg、5日および4日が標準投与方法とされてきた。しかし、保険医療上医療費削減の観点から本邦では200mg/kg×5日が基準となっている。一方、米国では2g/kg・一回投与がアメリカ心臓病学会

より推奨された。そこで、full doseの投与方法をして2g/kgの分割投与と一括投与のいずれがよいか、検討が必要となった。一方、full doesの投与にも関わらず炎症反応が消退せず、動脈瘤を形成する可能性の高い症例もあり、これらに対する追加療法の有効性も検討を要する。また、比較的軽症例では必ずしもfull doesの投与を要しないことにより、重症度に応じた至適用量の決定法に関する検討も必要である。

〔文献〕 1. 尾内善四郎、柳沢正義、等：
川崎病に対するpH4.処理酸性～
(1)至適投与量と有用性の検討。日本小児科学会雑誌，1992;96:2669-2679.

尾内善四郎 京都府立医科大学小児疾患研究施設内科部門
古庄巻史 京都大学小児科
加藤裕久 久留米大学小児科

2. Newburger JW, Takahashi M, Burns JC, et al. : The treatment of Kawasaki syndrome with intravenous gamma globulin. N Engl J Med, 1986; 315:341-347.

3. Sundel RP, Belser AS, Baker A, et al:Gamma globulin retreatment in Kawasaki disease. Abstracts of the fourth international symposium on Kawasaki disease, 1991, Hawaii.

Abstract

The study of gamma globlin therapy for Kawasaki disease

Onouchi Z. ⁽¹⁾Furusho K. ⁽²⁾Kato H. ⁽³⁾

(1)Division of Pediatrics, Children's Research Hospital, Kyoto Prefectural University of Medicine

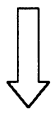
(2)Department of pediatrics, Kyoto University

(3)Department of Pediatrics, Kurume University

While a high dose gamma globlin therapy is proved the most effecient one, there are few studies in which the optimal dose has been determined. In light of this, we decided upon a multicenter retrospective study design.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】現在、川崎病の治療法として、ガンマグロブリン療法が最も優れたものとされているが、ガンマグロブリンの投与方法、投与量が正確には確立されていない。その点の研究を行う。